

「泉への森の小道」(II)

——マルカム・ラウリーの生と死の道——

‘The Forest Path to the Spring’ (II):

Malcolm Lowry’s Way of Life and Death

野 呂 正

要 旨

1940年8月から1954年8月まで、14年間、マルカム・ラウリーは妻とともにカナダ、ブリティッシュコロンビアの南西部、バラード入江の浜辺の小集落ダラトン（Dollarton）で暮らした。「泉への森の小道」はそのような都会を離れた自然の中での彼自身の生活体験を題材としている。ダラトンをモデルとしたエリダヌス（Eridanus）において、自身をモデルにした主人公のジャズミュージシャンは毎夕、森の小道を通して泉に行き、生活に絶対的に必要な水を汲んでくるのであるが、同時にその日課を果たす中で彼の内に自然、人生および芸術創造に対する覚醒が生じてくる。前稿「泉への森の小道」(I)においては都会生活しか知らなかった主人公の心の内に自然の真相が開けてゆく過程をたどったが、本稿(II)においては彼がその小道において自己の内面の闇に直面することによって、生と死を永遠に繰り返す生命の真相に目覚め、一段高い精神的境地に達すると同時に、その体験自体が彼が「泉への森の小道」と題するオペラを作曲する源になってゆく過程をたどってみた。

キーワード

マルカム・ラウリー、ダラトン、エリダヌス、泉への森の小道、自然と人生

前稿「泉への森の小道」(I)（中央大学人文研紀要、2012）においては主人公であるジャズミュージシャンの自然への目覚めを取り扱った。本稿においては彼が生と死の相剋を通して芸術創造に至る過程をたどってみる。

毎夕、ジャズミュージシャンは森の小道を通って泉へ水を汲みに行く。日々の些細な雑用に過ぎないが、それは彼と彼の妻に生命の根本的な糧である水をもたらし、かれらが自然の中で生存してゆくことを可能にする。その意味でこの小道は彼にとって生の道であり、愛と幸福の実現に至る道なのである。しかし同時にこの小道は彼にとっては死を孕むものでもある。彼はこの同じ小道において、彼の生を阻害し、破壊しようとするものに出くわすことになる。彼自身の心の闇に直面するのである。彼はエリダヌス永住を決意し、森の小道が発見され、泉通いの仕事が確立される以前、まだハネムーンの段階ですでにこのことを予感している。ある晩、彼は薪小屋から一方の手にランタンを下げ、他方の腕に薪を抱えて出てくる。ポーチにさしかかったとき、そこに自分の影を見る。それは「巨大で、丸太は棺と同じくらい大きかった、そしてそれは一瞬、我々を脅かすすべてのものの具現で、こちらを睨みつけているように思われた。そう、私自身の暗く、混沌とした側面、私の凶暴で、破壊的な無知の投影とさえ思われた」¹⁾。「棺」という比喩の中に死の影を見ることは容易であろう。

実際、泉通いを始めて数日後、彼は初めて自分自身の「暗く、混沌とした側面」、「凶暴で、破壊的な無知」に直面することになる。泉からの帰り道、彼はいつものようにぶらぶらしながら物思いにふける。エリダヌスにおいて、自分たちの生活は物質的にはひどく貧しいが、まるで楽園にあるかのようにいかに幸福であるか、対照的に外の世界は醜悪で地獄のようである、今や戦争で、人々が互いに殺し合い、それはさらにひどい地獄となっている。このようなことを思っているとき、彼は突然、これまで経験したことがないような激しい感情にとらえられる。それはすべてを包含するような強力なもので、彼はその場に立ちすくみ、水の入ったバニスターを地面に下ろさなければならないほどだった。

ちょっと前には、自分がどんなに妻を愛しているか、我々の幸福をどんなに感謝しているかを思っていた。それから思いは人間のことに移っていったが、今やその清浄だった感情が、これは紛れもないことだったが、憎悪になっていたのである。それも単なる普通の憎悪ではない。毒気を含み、凶悪で、激情のように動悸を打って体中の血管を走り回り、髪を逆立てさせ、口からよだれをたらさせるかと思われた。そしてそれはあらゆる人を押し流してしまう。私の妻以外のあらゆる人を²⁾。

ジャズミュージシャンはこれ以後、たびたびこの憎悪の感情に襲われる。それはあらゆるものを呑みこみ、まったくなだめようもなく、自分の内に発するものの、自分自身の感情とは思われぬようなものだった。彼は今戦争という形で世界を一掃しつつある「恐ろしい天罰」、あるいは人間が贖うべく送り込まれたと、ものの本に書かれている「自然の荒々しい力」、あるいはまた何か「恐ろしいウィンディゴ(wendigo)」のようなものを思い浮かべたりする。ウィンディゴとは、彼の知るところでは³⁾、復讐的で、人間を憎悪する荒野の霊、火に苦しむ森であり、インディアンたちがいまだに恐れ、その存在を信じているものである。

実際、彼はこの突然湧き起ってくる憎悪とそれに伴う苦痛を山火事になぞらえている。

私の苦悶する精神の混乱の中で、私の憎悪と苦痛は山火事そのものだった。それは破壊者で、ここ、あそこ、いたるところで起こる。それは呼吸し、動き、そして時々突然それが通った跡を引き返し、自滅さえして、まるでそれ自身の間抜けた心があるかのように振る舞う。そんなふうに私の憎悪はそれ自体ひとつの実体となり、破壊のバ

ターンとなった。しかし山火事の動きはほとんど入江の動きの歪曲のようなものである。炎は立ち並ぶ、乾いた、燃えやすいヒマラヤスギの中へ走りこみ、黄色い炎がそれらを薄切りにする。そして、見守っていると、これらの炎は津波のように丘の頂上へ押し寄せるように見える。しかしそうはならず、たぶん一時間後くらいには風が変わってしまい、あるいは火が大きくなりすぎて、今度はその前進に抵抗する隙間風を吸い込んでゆく。それで火は丘の上に押し寄せることはなく徐々に引いてゆき、最初の突進のときになぎ倒した木々の小片を食い尽くしてゆく。そんなふうには憎悪の動きは内側に向かい、私自身に戻ってきて、その炎で私自身をなめつくすようだった⁴⁾。

人間に対する憎悪という形をとって、突如現れたこの情動がジャズミュージシャンの心の言わば闇の部分から発したものであることは明らかであろう。彼自身の言葉で言えば「私の凶暴で、破壊的な無知」である。それは彼を驚愕させ、苦悶させ、水を運ぶという彼の生の営為を中断させ、それとは反対の方向、つまり死に向かわせようとする。それはまた自己中心的なもので、自分と妻以外のあらゆる人を押し流してしまう。同時にそれは自己破壊に帰着する。憎悪は山火事のように「内側に向かい、私自身に戻ってきて、その炎で私自身をなめつくす」のである。精神分析の言葉を使うならば、彼は泉への小道において自身のタナトスに直面したのである。

このことは泉への小道における彼のもうひとつの体験、一種ダリの絵を思わせる夢魔的な体験からも明らかであろう。これも憎悪の激発同様、泉からの帰り道でのことである。

ある日、私は小道において、端はほつれているが丈夫なロープが木

の切り株の上に捨てられているのを見た。そして私は思った。そう、それがそのような思考の恐ろしい結末なのだ。本当に私は自殺したいのだろうか？ その考えにびっくり仰天して、私はそのロープを持ち帰り、色々なことに利用するために引き裂いた⁵⁾。

ジャズミュージシャンはこの自殺衝動が生じてきた状況を具体的に語っている。それは彼の意識が自然から離れ、自己の内面に向かっている点で特徴的である。季節は厳しい冬もようやく過ぎ、早春である。実際にはまだ移ってはいなかったが、彼はこの頃には入り江の対岸に新しい家を手に入れており、エリダヌスでの生活は今の掘っ立て小屋におけるよりも安定したものになる展望が開けていた。彼は毎夕泉へ水を汲みに行くのだが、泉につくと、水を導く鉄の管の下にキャニスターを置き、水が一杯になるのを待ちながら、周囲の自然を意識するのが通例だった。入り江をのぼってくるカモメを見守り、樹木の幹を見上げ、天辺の小枝が風に揺れるのを眺め、夕暮れの香りを吸いこむ——湿った大地の芳しい匂い、咲きはじめてた草花の春の香り、そして塩気を含んだ磯の香りが混じり合っている。しかしある日、彼はどういうわけか周囲の自然に意識を向けるといふ、この泉通いのいわば儀式を忘れる。彼は何も見ず、何の匂いも感じていなかったのである。そして突然、帰り道が彼には非常に違ったものになったのである。楽しい労働が文字通り苦行に変わったのである。

キャニスターには4ガロンの水が入っているだけだったが、そして私の体は丈夫になっていたので、その仕事は、以前よりずっと軽く思われるはずだが、この晩それは1トンの重みを持ち、歩みもすり足で、一歩一歩という状態だった。すぐに立ち止まって息をついた。最悪の場所は泉へ行く途中、私があんなにも陽気に走ってきたくほみ

だった。それが帰り道では正真正銘の難所になって、私はキャニスターを運び上げるというよりは、引きずりあげなければならなかった⁶⁾。

この平安な心を突き崩す仕事の変容に彼は驚き、その原因をはかりかねて様々に思い悩む。「我々があれほど切望していた泉が手に入った今、浜辺での我々の生活が、新しい家を手に入れたことで二重に確実に変わったように思われる今、自分は何に悩んでいるのか？」⁷⁾と彼は自問する。それは神が与えてくれるものに満足しない人間に対する天罰のようにさえ思われてくる。このような思いは彼に泉へ行くことに対する恐れを抱かせる。「今や一日中どんなに幸せであっても、恐れを抱かせるもろもろの思いがまるで泉のところで私を待ち受けているかのようにだった」⁸⁾と彼は言う。そしてこのような心理的重圧の中で、彼はある日切り株の上にロープを見ることがなるのである。

しかし彼は実際には、破壊や死の衝動に駆られて現実の死に至ることはない。彼の内にそれに抵抗するものがあるのである。ひとつはエリダヌスの浜に住む漁師たちの愛他的な精神への彼の共感とかれらとの人間的な交流であり、もうひとつは妻への愛である。

エリダヌスの漁師たちは自然の中で、その営みに謙虚に従いながら、ひっそりと生きている。それぞれ孤立を保っているが、その心は無私で、善意と気遣いにあふれている。かれらは「ただ無私的行為を行うためだけに、何かの点で我々を助けるために、あるいは贈り物を持ってくるためだけに一日中待っている」⁹⁾ような人々である。例えば、チャンネル諸島出身の漁師モーガー (Mauger) は「よくボートに乗って我々の家を偵察にやってくる。カニやサケを我々に迷惑をかけることなく持ってくるのに一番よいときを見つけるためである。そして支払いを受け取ることは決してな

い。反対に彼の方が、我々にカニを与える特権に対して、我々を話や歌で豊かにすることによって支払いをするのだ¹⁰⁾。実際、彼はこのような人々と酒を飲み、一緒に歌を歌うようになる。かれらの方もそれを楽しみにするようになる。船大工クアガン (Quaggan) などはかれら夫婦のことがとても好きになり、かれらが彼に会いに行くたびにカレンダーに赤い印をつけるほどなのである。このような人々に対して憎悪が入り込む余地などないのである。

一方、妻への愛は彼の心を死への願望から生きる喜びの方へ向けさせる。衝動に歯止めをかけ、彼を生の方に向かわせる。彼は泉に行くことをそれがもたらす苦悶故に恐れると同時に、自分がそれを楽しみにしていることにも気づく。それは妻との愛の結びつきによってもたらされる喜びを倍増するからである。一日の内で彼が妻から離れるのは彼が泉に行くときだけであるが、彼は言う。

私がそれを楽しみにしていたのは私が彼女から引き離されるからではなく、そのあとで、まるで長旅の後でもあるかのように、彼女のところに戻ってくる喜びを楽しむことができるという、まさにその理由からだった。その旅は一種の苦悶であるかもしれない、あるいは実際そうなってしまうのだが、しかし我々は常にせいぜい20分ぐらいの果てしのない別離の後で喜びと安堵の叫びをあげて再び出会うのだった¹¹⁾。

そしてこのような精神状態の中で、泉へ行くことは彼にとっては希望にあふれ、未来に向かって、新しい家に向かって進んでゆくように思われてくるのである。またそれは彼に機械的なものからは程遠い単純な人間的達成感をも感じさせてくれる。彼は浜辺から引き上げた古い梯子のことを思

い出す。彼はその腐った部分をたたき切って、小屋から泉への小道に出るのに現在も使っている階段にしたのである。彼の心は死への傾斜から生の方向に向かうのである。

このような思考の展開の中で、やがて彼は仕事それ自体には、それが骨の折れることだからといって、彼を恐れさせるものはないことに思い至る。そして「私が本当に恐れていたのは何か私の思考に関係があるもの、泉からの帰り道で、特に坂にさしかかるところで常に引き出される何かである」¹²⁾という結論に達する。つまり泉からの帰り道、彼の意識は周囲の自然から切り離され、もっぱら内面に向けられ、そこに彼は何か恐ろしいものを見ていたというわけである。しかしその恐ろしいものの正体を彼がはっきりと見極め、それによって恐怖から解放されるには、もうひとつの体験が必要だった。山の猛獣クーガとの遭遇である。

ある日、彼は泉からの帰り道、傍らの楓の半ばほどの枝に一匹のクーガが窮屈そうな姿勢でうずくまっているのに出くわす。クーガへの対処法はいろいろ聞き知っていたが、この場合何の役にも立たない。何の武器も持っておらず、また逃げ出すことも無益であるばかりでなく実際にできない。それで彼は完全にじっとして立っていた。クーガも彼も至近距離で互いの目をまっすぐに見つめあいながら、相手がどうするのかを確かめるために待っているだけだった。

このような緊張状態の中で、やがて彼には自分がクーガに向かって何か言っているのが聞こえてくる。それは何か途方もなく馬鹿げた内容で、口調は命令的だが穏やかである。彼はクーガに対して「兄弟、本当だよ。ある意味では俺はお前が好きだ。それでも、ここだけの話だが、行ってくれ！」¹³⁾と言っていたのである。これに対してクーガは不意を突かれたのか、その体には細すぎる枝の上でバランスを失ったのか、ぎこちなく地上に飛び下り、その無様な跳躍を恥じるかのように、あるいはこちらの穏や

かな声に恥入るかのように、こそこそと藪の中に入っていったのである。その後彼の方は無我夢中の状態で小道の残りの部分を辿り、家に帰ってくる。妻には外に出ないように言い、ボートを漕いで近隣の人々にクーガが出たことを伝えて回り、警戒を促す。このような事態においてなすべきことを冷静に行ったのである。

泉への小道におけるこの体験を通して、ジャズミュージシャンは自分に恐怖を与えていたものの正体を見極めることになる。その晩床について、彼はクーガとの対峙を思い返す。そして彼がその猛獣を恐れなかったのは、何か他のことをもっと恐れていたからであるということに思い至る。「泉への小道の坂のところで、私はクーガという具体的現実でさえ取って代わることができないほどずっと大きな恐怖の予期にすでにとらえられていたのだ」¹⁴⁾と彼は言う。それは何か内面的なもの、彼自身の心の奥底に潜むものなのである。内省を通して彼は自身の心の深層に、ほとんど無意識的な心の闇に眼を向ける。

まるで過去の自分の心に入ったかのようにだった。単に夜じっと考え込んでいるだけの自分の心ではなく、眠りが幻覚をもたらし、思考が深い割れ目に沿って互いに追いかけてあう昔の自分の心だ。私は半ば意識的に自分に言い聞かせた。小道において私は実際に何か我々の楽園のあらゆる方向から我々に向かって飛び出してくるように思われるものを警戒していたのだ。あの名状しがたい夢遊、罪悪感、食屍鬼のような過去の幻覚、他の人の心や生命に与えた苦痛、たとえこの世における自分自身の行為ではないにしても、殺人に近い行為の亡霊、自分に対する裏切りなどが、何か恐ろしい動物の姿を取って飛び出してきた、自分を破壊し、我々を、我々の幸福を破壊するのではないかと思っていたのだ。それで、こうしたことすべての答えであるかのよう

に、単なるクーガを見たとき、どうして私が恐れることなどあり得ようか¹⁵⁾。

この内省による自己の心の闇の直視の後、彼にとって泉への小道はそれまでとはまったく違ったものになる。それはもはや何か恐ろしく危険なもの awaits 待っている道ではない。また過酷な労働を強いられる道ではない。それは彼の目を再度自然の大きな営みに向けさせ、彼がその中に溶け込んでゆく道であり、また自ずと歌が湧き上がり、幸福感に満たされ、軽やかに歩を運ぶ道である。

クーガとの遭遇があった次の夕方、泉に出かけるに際して、かれは一応それに対する心構えをするが、それはありきたりなもので、どこか本気に欠ける場所があった。実際、小道に出て彼の意識を占めるのはクーガのことではなく、強風に吹き荒れる山々の光景である。

その夕方、山々の様相にみられる何かが私の注意をクーガからそらした。暖かな夕方だったが、風が強く山々は荒れて混沌としていた。雪を通して見える北極の島のようなようだった。実際、ここ三日ほど、夜山々の下の方で雪が降っていたのだ¹⁶⁾。

そしてごうごうとうなりをあげて木々の天辺をゆるする強風の中をクアガンの息子たちのひとりが小道を走りながら彼を追い抜いてゆく。

「本当にひどく吹いている。ちょっと大急ぎで事がどうなっているか見てくる」

私はこのケルト的な言い方が私を喜ばせたことを覚えている。彼の船が、あるいは多分町に行っているクリストビヨルグ (Kristbjorg) の

船が錨を引きずっているのだ。私の助けが必要ななら声をかけてくれと言った¹⁷⁾。

クアガンもクリストビヨルグも自然の中で、それに逆らうことなく謙虚に生き、それぞれ孤立を保ちながらも同時に愛他的な心を持ったエリダヌスの住民である。彼が最後に手助けを申し出るのはかれらのそのような生き方と心に対する共感の表明なのである。また彼はキャニスターに水がたまるのを待ちながら、強風に翻弄されながらも必死にねぐらに帰ろうとするカモメを見て感動する。カモメも自分も同じ自然の中で生きていると思うのである。彼の心は自己破滅的な死への傾斜から生の道に引き戻されたのである。

この日のことでもうひとつ彼が鮮明に覚えていることがある。それは「私は歌を歌いながら坂を、一步の歩みも、またその困難さも覚えていない状態で通り過ぎていた」¹⁸⁾ことである。心の闇から何か恐ろしいものが襲ってくる恐怖からの解放感と自然の世界への回帰の喜びが歌となって湧き出し、坂での苦しみを忘れさせたのであろう。しかし坂を意識しないでやすやすと通り過ぎたという感覚にはもうひとつ別な側面がある。それは泉へ行くたびに強くなってゆき、ついに彼には泉への道自体が縮んだかのように思われてくる。

このときはほんとうにその感覚はこれまでになく強かった。それで実際に、私には小道が両端において縮んでゆくように思われた。坂、そしてキャニスターの重さを意識していないばかりでなく、泉からの戻りの小道が、そこへの行きの小道より短くなりつつあるのをはっきり感じたのである。そこへ行く道も前の日より短くなっているように思われたにもかかわらずそうだったのである。家にもどったとき、私

はまるで妻の腕の中へと飛んできたようだった¹⁹⁾。

この不思議な感覚を彼は妻に説明しようとするが、「心から重荷が取り去られたかのようだ」といった月並みなことしか言えない。しかし同時に彼は彼の心に何か重大なことが起こったことを意識する。そして彼はその感覚が、泉への小道自体が変わったためでなく、彼自身の心が変わったところから来るものであることを知る。天来ものなのか、自己の無意識的思索の結果なのか分からないけれども、彼は突然ある一段高い精神的境地に達したのである。彼の心は光に満たされていたのである。その様相を彼は込み入ったイメージを用いて説明するが、要約すると以下のようになる。

私の存在が、夕暮れに月によってではなく、日の出に突然日の光に透過されて、入江そのものに変容させられたかのようだった。それで私は心の奥深くにそこに映った太陽を内包しているように思われた。だがその太陽は 次にはその光と暖かさによって何か完全に単純なもの、よりよい人間でありたい、より多くのやさしさ、理解、愛が可能であるようになりたいという願望に変容してゆく²⁰⁾。

簡単に言えば、彼の心は明るくなり、迷妄を脱し、人間的により高いものを求めるようになったということであろう。泉への小道はもはや彼に労働を強いるものではなく、彼が自然の中に入り、妻との合一を達成する喜びに満ちたものになったのである。

しかしこれは心の闇がなくなったとか、消えてしまったとかということではない。確かにクーガの経験を通してもろもろの迷妄はなくなったが、それは相変わらずそこにあるのである。ただ今や彼はそれに一段高いところから向かい合うようになり、それによって彼にはその全体像と本質が分

かってきたのである。

同時に私は再び私の陰鬱な思考を意識するようになった。しかしその仕方はまったく違っていた。どう言ったらいいだろうか？ 私はそれらの思考を遠くに、まるで下方にあるかのように、見ていた。ある意味で私はそれらを見ていたのではなく、聞いていた。それらは流れていた。それらは川、また入江のようだった。それらは再現することも明確にすることも不可能な全体的企図を含んでいた。それにもかかわらず、これらの思考は、それは底知れぬもので、私が願っていたほどうれしいものではなかったが、しかしそれらは動いているけれども、同時に整然としていることにおいて、私をうれしい気持ちにさせた。入江はどんなに潮が満ちても岸からあふれることはない、またそれは干上がることはない、潮は引いてもまた満ちてくる、実際、クアガンが言っていた通り、それは同時に両方のことができるのだ²¹⁾。

この陰鬱な思考において注目し値するのは、彼が自己の心の闇の中に、入江という比喩からも明らかなように、自然の根源的な力と重なり合うものを認めていることである。目には見えないけれど、自然の多彩な形象と変化の奥に絶えず働いている流動的な力である。それは個々の事物や生き物に死をもたらすが、同時に再生という形で生を維持してゆく。冬には草花は枯れてしまうが、春が廻ってくると芽を出し、花を咲かせる。精神の世界においても闇の中に沈んだ過去の自己は光り輝く自己となって再生するのである。彼は内省を通してそれを認識したのだと言えよう。

この認識はジャズミュージシャンにとって特に貴重なものだった。実は、彼は一人の音楽家として何か作曲をしてみたいと考えていたのである。音楽によって「宇宙そのもの根本的な鼓動とリズム」²²⁾を伝えたいと

というのが彼の願いだったのである。そのような彼にとって自然、そして自己の根源的な力の認識は芸術創造のインスピレーションでもあったのである。彼の陰鬱な思考について述べた一節の最後のところで、彼は「何か自己省察の恐ろしい極みが私の計画を実現させるのに必要になってゆくと気づいた」²³⁾と言っているのである。「計画」とはもちろん作曲のことである。実際、様々な技術的困難、また新しい家が火事にあうという苦難を乗り越えて、彼はひとつのオペラを作曲する。それは彼が心の闇の恐怖を脱して、エリダヌスにおける妻との幸福を達成するということをテーマとするもので、題名は「泉への森の小道」なのである。

註

- 1) Lowry, M., *Hear Us O Lord From Heaven Thy Dwelling Place & Lunar Causitic*, Penguin Books, 1979, p. 234.
- 2) *Ibid.*, p. 245.
- 3) 一般には「北米のアルゴンキン族 (Algonquian) の神話に登場する、森をさまよう人食い鬼：道に迷い飢えにかられて人肉を食った狩人の変じたものという」(研究社 新英和大辞典)。
- 4) *Op.cit.*, pp. 245-346.
- 5) *Ibid.*, p. 263.
- 6) *Ibid.*, pp. 262-263.
- 7) *Ibid.*, p. 263.
- 8) *Ibid.*, p. 263.
- 9) *Ibid.*, p. 246.
- 10) *Ibid.*, p. 246.
- 11) *Ibid.*, p. 263.
- 12) *Ibid.*, p. 264.
- 13) *Ibid.*, p. 265.
- 14) *Ibid.*, p. 266.
- 15) *Ibid.*, p. 266.
- 16) *Ibid.*, p. 267.
- 17) *Ibid.*, pp. 267-268.

- 18) *Ibid.*, p. 268.
- 19) *Ibid.*, p. 271.
- 20) *Ibid.*, p. 272.
- 21) *Ibid.*, p. 268.
- 22) *Ibid.*, p. 270.
- 23) *Ibid.*, p. 268.